
アイデアにて

北島桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイデアにて

【Nコード】

N8061N

【作者名】

北島桜

【あらすじ】

おじさんの家に住むようになって、一年以上経った。おじさんと、その娘の沙織も優しいし、不満なんてない。
ないのだけれど、りつと会えないのが少し……じれったい。

（前書き）

よろしく願います。

どこにでもあると思う。誰にでもあると思う。だって、全ての物には綺麗なものがあらしいから。昔の偉い人がそう言っていたんだから、きっとそうなんだろう。

綺麗な水面に手を挿して、水中へゆつくりと進ませる。そこには目に見えない色々なものがあって、掬うと零れてしまう。

全が1で、無が0で。マイナスすぎたり、プラスすぎたり、そうすると存在する事ができなくて、僕らは足しては引いて。そしてまた、足しては引いて存在していく。マイナスとプラスが同じ数存在しているとよく聞くけれど、そうしたら世界は存在できない。

もしも世界に、この世の全てのマイナスがあるとしたら。僕はそこで、悲しいラブソングを歌う。

りつとは出会いがない。小さい頃からずっと一緒に、まさか好きになるとは思っていなかった。

初めてのデートは、確か地元の中学校のグラウンドでやる小さな祭り。りつにデートだね、と言われて初めて気づいた。

どこが好きなのか考えてみた。落ち着いた調子で、いつもどこかに気品を感じられる。けれど、僕が好きになったのはそんなところ

じゃなくて、もっと別のところ。たとえば、合わせ鏡の一番奥のものを見るような。だからそういうよくわからない感じを、絵に描いてみようと思った。

キャンバスはまだ真っ白で、鉛筆を走らせる事ができていない。何もないキャンバスの前にいると、いつだってそうになってしまう。何もないこのキャンバスから、モナリザのような作品が生まれる可能性もある。けれど、僕が一筆でも加えてしまえばそれが台無しになってしまうんじゃないだろうか、だとしたらこのままにしておいた方がいいんじゃないだろうか。

僕はため息をつく、黒鉛を置いて立ち上がった。部屋を出てリビングに行くと、沙織がソファでだらしなく転がっていた。目は虚ろで、よだれがでているのも気にせず微笑している。僕がティッシュでそれを拭いてやると、

「あー、音也だ。えへえ、何してるのぉおお」

「うん、ちょっとお腹すいたなって思っで。何かないかな」

「あるよ、これあげるうってばあははははは」

沙織はゆっくり立ち上がると、服を脱いで胸を突き出してきた。そして笑い続ける。

僕は服を拾い上げると沙織に着せてやって、再びよだれがでいたのでそれを拭いた。ソファに沙織を座らせてから冷蔵庫を覗いても何もなかった、リビングに戻ってテレビをつけた。沙織がまだ笑い続けているせいで、テレビの音が聞こえない。

文字だけを追ってみたけれど、やっぱり内容はあまりわからない。文句を言おうかと思ったけれど、言ったら言ったでうるさくなりそうなのでやめた。

そういえば、沙織は何か食べたんだろうか。すでに夜九時を回っているけれど、流し台にそれらしき物はなかった。

ちょっとコンビニに行ってくるね、と言って外に出た。遠くでサイレンの音が聞こえる。ふと、鈴虫の声がない事に気づいた。もう秋になったから、当然と言えば当然なのだけだ。

静かな夜道を十分ほど歩いて、コンビニ弁当を適当に二つ買った。家に戻ると、沙織はさっきと変わらない形でソファにぐったりしている。けれど表情はさっきと全然違うから、たぶん波がすぎたんだろう。

「弁当買ってきたよ」

僕が言うと、沙織はだるそうにうめいた。スポーツドリンクを渡してやると、少し口に含んでから立ち上がった。

「吐く」

一言言っで、トイレに行ってしまった。座卓の上に、ビニールの包みがあったので手にとってみると、下の方に白い粉を見つけた。これはなんだろう。

僕がこの家に住むようになった時には、すでに沙織はこんなだった。初めて見た時はちょっと驚いたけど、人間の適応力っていうのは意外とすごいらしい。おじさんも沙織と同じような事をたまにし

ているし、今ではもう慣れてしまった。

そういう事に対して、僕は軽蔑もしないし卑下もしていない。だからというわけじゃないけれど、止めようとは思わないし、たぶん言ってもきかない。

沙織が戻ってきた。ソファに座って、スポーツドリンクをちびりちびりとやってから天井を仰いだ。

「大丈夫？」

僕が言うと、沙織の頭が少し動いた。金髪の髪がさらさらと動いているのを見て、綺麗だなあと思った。

「音也、絵は順調……？」

「新しい絵を描こうと思ってるよ、イメージも一応あるしね」

「そっか」

沙織はそれきり何も言わなくなった。僕も弁当を食べ終わると、自分の部屋に戻った。僕のために二つも部屋を用意してもらっているのは申し訳ないけれど、油の臭いが充満しているあの部屋で眠る事はさすがにできない。とは言っても、絵画関係の道具だけしかないあの部屋よりも、僕の部屋は物が無い。机にベッド、後は本棚があるだけで、寂しいなあとは思っけれど、趣味らしい趣味もない。

毛布に包まると、すぐに眠れた。

休日を挟んだ学校っていうのは、どうしてもこう憂鬱になるんだろ

う。だらけるのはよくないとは思っただけど、どうにもならない。

放課後、隣のクラスから佐伯くんがやってきて、話し掛けてきた。

「今日は来たんだな」

「うん。佐伯くんは、これから部活？」

「おう」

がっちりとした両腕で、シュートする真似をしてみせた。バスケ部の部長という、僕からしたらすごい立場の人なのだけど、二年生の頃一緒にクラスの隣の席だったから、よく話すようになった。一年生の頃に描いた僕の絵を見て、心に残るものがあつたと言っていた。褒められて嬉しくならない人はいないの例に漏れず、僕からも話しかけるようになっていた事は、つい最近気がついた。

「なあ、やっぱり音也もバスケやろうぜ。月曜、毎週のように休むのは青春の無駄遣いだって」

笑顔で言う佐伯くん。気を遣ってくれているのはわかるのだけど、僕は運動が苦手だ。考えておくよと言うと、佐伯くんは話題を変えた。

そんなふうに佐伯くと話していると、今度は前島先生に声をかけられた。無愛想な表情で僕たちに近づいてくると、メガネを直した。

「青木、今日は部活に出るのか。最近、顔出していないじゃないか。……責めているわけではないが」

そういえば、最後に顔を出したのは先週だっただろうか。月に一度か二度しか顔を出していない。

僕が黙っていると、

「……お前には今度の学校祭で作品を展示してもらいたいんだがな。何より、私がみたいんだ」

前島先生はネクタイを調整すると、ため息をついた。

そこへ、佐伯くんが陽気に声を上げた。

「こいつの絵、すごいすよね。なのに部活もしないで家にこもってばかりっていうのは、もったいないと思うんですよ」

「ああ、私もそう思う」

なんだか、褒められすぎて逆に恐縮してしまう。僕の作品はそこまでいい物なんだろうか。普段は寡黙で有名の前島先生がここまで喋るのも、初めて見るくらいだ。

「……まあ強制しているわけではない。余裕があるなら、顔を出さない」

そう言うと、前島先生は去っていった。佐伯くんも部活に行くと行って、その場を離れた。

美術部には出るべきなんだろうか。少しの間考えて、結局帰る事にした。以前は毎日出ていた気がするけれど、たぶん両親が死んで

からあまり出なくなっただんたと思う。死んだショックでというわけじゃない。ただなんとなく……でていないだけで。

そういえば、家族が死んでからもう一年も経っている。キャンパスの前に座りながら、ふと思いついた。高校一年の頃に両親が死んで、今はもう二年生の秋だ。時間っていうのは早いものだなあ。

黒鉛をキャンバスに走らせたたん、なんだかすごく残念な物になったような気がした。しばらく熱中していると、お腹の音が聞こえた。時計を見ると八時を指していた。最近はずっとこんな生活を送っているような気がする。

それにしても学校祭か。普通は夏頃にやるものだと思うけれど、うちの学校はちよつと特殊で、体育祭と文化祭が一緒になっている。理由はよくわからないけど、十一月の一週間をそれだけのために割いてしまう。最後の日には、町内会主催の屋台があるようなお祭りもある。そういう事っていうのは、別々にした方がいいと思うけど、学校側の意向なのだから仕方がない。

次の日、美術室に行くとな数人の生徒が部活動をしているだけだった。見回してみても、精巧な造りの彫像や偉そうな絵が並んでいるだけで、前島先生はどこにもいない。聞いてみると、準備室にいると言われたので行ってみた。

準備室に入ると、煙草のにおいに思わず顔をしかめてしまった。それを見られたのか、薄暗い部屋の窓際にいた前島先生のシルエツトが、笑ったように揺れた。

「悪いな」言いつつも、火を消そうとはしない。

「学校の敷地内は禁煙のはずですけど」

煙草というか、依存性のある物はいつまでも続けてしまいそうで敬遠気味だ。いい例が、絵の事がある。筆とは、もう小学校からの付き合いになる。

「どうせ誰も来ない。部員数も少ないし、美術教師も私だけだ。掃除もさせていない寂れたところだからな」

そういう事を言っているんじゃないんですけどという言葉は飲み込んで、学校祭の絵を描いてみると言った。

「そうか」

「……昨日はあれだけ描いて欲しいみたいな事言ってたのに、淡白なんですね」

前島先生は肩をすくめた。もちろん、僕の嫌味は本心じゃない。絵の事は、きつと口実だったんだろう。

「まあ、描くなら描くで物是用意してある。元々、青木が描く事を前提に展示スペースはとってあった。美術部としては、歓迎だよ」

準備室を出ると、さっそく絵にとりかかった。キャンバスを前にして、やっぱり迷ってしまう。どんな物を描こう。十分ほど色々と考えた。

そういえばもしかしたら、今僕が家で描いている絵は、おじさんや沙織の好みじゃないかも知れない。あれはそれなりに心をこめて描くつもりだけれど、おじさんたちは気に入らないんじゃないだろう

うか。今から描こうとしている絵も、手を抜くつもりはないけれど。

おじさんたちに気に入られた絵は、とんでもないような物だったような気がする。連続殺人犯が主人公の小説を読んで、その時感じたものを絵にしてみたら、二年前に高校生だった沙織がもらっていたかと尋ねてきた。中学校の学校祭に偶然来ていたらしい。

それから沙織と同じ高校になって、絵の事で話しかけられるようになって、よく話すようになった。ちょうど去年の今頃に両親が死んでしまって、仲のよかった沙織は僕を心配してくれた。数日はホテルで暮らしていたのだけど、沙織がよかったですらうちで暮らさないかと言ってくれた。

それからいくつか絵を描いているうちに、おじさんと沙織の好みが大体わかったと思う。だから、感謝の気持ちもこめてそういうのを描いてみよう。そう思って、僕はキャンバスに黒鉛を走らせた。

先生に声をかけられて、すでに日が落ちている事にやっと気づいた。家に帰ると、リビングでおじさんと沙織が談笑していた。僕がただいまを言うと、二人は笑顔で迎えてくれた。

ふと、おじさんの薬指にアクセサリーがつけられている事に気がついた。短髪で少し小太りしているけれど、背が高いので迫力がある。そんな風貌のおじさんは、ブランド物のネックスをしながら、背中に刺青を入れていたりしているのだけど、指輪は初めてだった。

指摘はせずに、

「ご飯作るね」と言った。

「音也は待つてなよ。あたしが作るからさ」沙織が僕をとめた。

「でも、悪いよ」

「音也は絵にだけ集中してればいいの。がんばなさい」

という沙織にしたがって、僕はリビングで待つ事にした。おじさんは座卓の上にあったビールをグラスに注ぐと、黙って僕に差し出した。僕も黙って受け取って、ちびりと飲んだ。苦い。

「沙織、アレはあるのか」

おじさんがキッチンにいる沙織に、低い声で呼びかけた。あるよ、ご飯の後でいいかな。

「ご飯を食べ終わると、二人は錠剤を口に含んでいた。今日は注射じゃないんだなあと思いながら、僕は風呂へ向かった。着替えている途中、笑い声が聞こえた。

風呂から上がって自室に行くと、携帯電話のライトが点滅していた。電話をとると、非通知設定で電話を着信している。僕は思わず笑顔になって、電話にでた。

「こんばんは、音也？」

「うん、こんばんは」

りつの声を最後に聞いたのは、もう何年も前のような気がする。このあいだ聞いたばかりだっていうのに、どうしてだろう。

「うん、今度の日曜日、暇になって思ってた」

「どうして？」

一応、用事といえば絵の事がある。学校祭に出展する絵は、期限まで一ヶ月ない。

「よかったら遊べないかな」

「大丈夫だよ、全然暇だよ」

「う……うん、即答だね」

「そんな事ないと思うけど」

それから、絵の事や学校の事を話したり、りつの愚痴を聞いて電話が終わった。友達の彼氏だったという人が浮気していたらしい。やっぱり、僕は背徳行為に対して肯定的でも否定的でもないから、別にいいんじゃないかなあと思った。言わなかったけれど。

おじさんの家にお世話になる時にりつも誘ったのだけれど、親戚にお世話になるからと断られてしまった。両親が死んで、唯一の家族といえぱりつだけだったし、できれば一緒に住みたかったとは思う。

けれど、りつはたまにこうして連絡をくれる。僕が連絡先を聞くと、

「私から会いたい時に会おう。だって、あんまり会いすぎるとお父

さんとお母さんの事思い出しちゃうから」と言われた。

そうは思っけど、僕はやっぱり納得できなくて、最初は何度か非難めいた事を言っていた気がする。

日曜日はすぐにやってきた。絵を描いていると、どうしてかタイムスリップしたみたいな錯角をしてしまう。それをこんなふうには有効活用できるのなら、いいのかなあ。ちょっともない気がするけれど。

リビングに行くと、沙織だけがいた。僕を見るなり、

「今日もりつちゃん来るの？」

と嬉しそうに言った。僕は照れ隠しに頭をかいて、曖昧に頷いた。

「じゃあ、あたしも出かけるよ。お父さんも夕方には帰ってくるって言ってた」

そう言って、沙織は家を出て行った。そういえば、りつが遊びに来る時は、二人はいつも出かけている。気を遣ってくれている事に、少し嬉しくなった。

それから少しして、インターフォンが鳴った。けれど、ディスプレイを覗いても誰もいない。ああ、りつだ。思いながら、玄関に向かうとカメラの死角からりつが現れた。緩やかにウェーブしている髪が胸の辺りで落ち着いていて、上品な青いワンピースと違和感なく溶け合っている。久しぶり、と挨拶されたので、やっぱり綺麗だなあと思いながらそれに返した。

「今日は音也の絵を見たいなって思ってた」

リビングでお茶を飲みながらくつろいでいると、りつはそんな事を言った。

「学校祭に出すのも、後もう一つの絵もまだ途中だけど、それでもいいの？」

そんな事、かまわないよ。りつはそう言って笑った。

キャンバスや絵の具だけの部屋は、相変わらず油臭い。こういうところで、できればりつと過ごしたくないのだけど。たとえば遊園地とか、映画館とか、そういうところで笑いあいたい。

描きかけの絵を見て、りつは首を傾げた。

「これは、何を描いているの？」

やっぱり聞かれた。まさかりつへの気持ち、とは答えられないので、

「たとえば、合わせ鏡を覗くじゃない」

と言った。

「それで、ずっと奥の方を見ようとするんだ。そこに写っているのはよく知っている自分の顔だけしか映ってなくて、けれどある時、一番奥にある世界で一番綺麗なものを見つけた……っていう感じを描いているんだ」

りつは納得したような、感心したような顔で頷いた。

「だから抽象画っぽくなってるんだね。って言っても、絵が得意じゃない私にはあんまりわからないかな。ごめんね」

「僕も、描いててまだあんまりわかってないくらいだからね」

そう言うと、申し訳なさそうだったりつは笑った。

部屋を出て、僕の部屋に入るなり、りつはため息をついた。

「もうちょっと、汚いくらいでもいいと思うけど。男の子の部屋にしては綺麗すぎるよ。むしろ女の子でもこんなに綺麗な人いるのかなあ。人が住んでないみたい」

「僕もそう思う」

苦笑いしてしまった。りつはベッドに座って、正面から僕を見た。

「家の人とはうまくやってる？」

急にそんな事を言われて、僕はどきりとした。曖昧に返事すると、りつに観察するような目でじつと見つめられて、なんだかおかしい汗がでてきた。りつは僕を見るだけで、何も言わないと決めたのか再びため息をついた。

りつが帰ったあと、お世話になっている人に迷惑かけるのはやっぱりいけないよなあと思った。法律で禁止されているからといって、僕がそういう物を否定しているわけじゃない。肯定的でもないにせよ、今の居場所は気に入っている。

紅葉が道端に目立つようになるのに比例して、放課後の学校は賑やかになっていく。中間テストがそういう時期にあるので、学校中の誰もがてんてこまいだ。先生たちなんかは、町内会の人たちとお祭りの打ち合わせもあるだろうから、きっと僕たちよりも忙しいと思う。

その証拠に、元々神経質だった数学の先生が、僕のクラスの授業をしている時に誰もいない場所にぶつぶつと呟くようになった。みんなは気味悪がったり、幽霊に取り付かれたとかクスリをやっていると、色々な憶測をして面白がった。授業が終わって教室から出ていく時に、虚ろに笑って奇声をあげた。

僕といえば、相変わらず絵を描き続けた。その疲れのせいか、最近おかしなな夢を見る。

真っ赤に染まった部屋で、両親が笑っている。お父さんは自分の首を手にとっていて、お母さんは机の上で首だけになって笑っている。ミミズが成長しすぎたような物は、お父さんの腹がボロボロになっているからたぶん、お父さんの物だと思う。

そんなところにりつがいて、異様な部屋の中の唯一の普通だった。あの青いワンピースを着て、僕に笑いかける。僕に抱きついて、耳元で色々と囁く。それから、顔を離してみると、りつの顔は口裂け女以上にぱっくりと裂けていて、いつの間にか血まみれになっている。そこで目が覚める。

夢を見た日は、色々な人に心配された。佐伯くんは眉を八の字にして、前島先生は眉をしかめて。おじさんと沙織には、そういう時にこそ笑顔だと元気付けられた。体のたるさや吐き気もあるし、み

んなの言う通りちょっと休んだ方がいいんだろうか。

けれど学校祭もあるし、絵も描かなくてはいけない。

ある日、前島先生に呼び出されて煙草くさい準備室で話した。

「青木、お前にとって絵ってなんだ」

「はあ、言葉にできない何かを表現する物だと思っていますけど」

「ああ、そうだな。確かにそうだ。だがお前の学祭に出そうとしている絵、というか、今までよく描いていた絵は、だとすると少し奇妙だな」

「奇妙、ですか」

「いや、可哀想……とも違う。とにかく、おそらくマイナスの感情があるだろう」

僕が黙っていると、

「お前は才能がある、余計すぎるものまで表現できてしまうくらいの才能が。」

私も、両親が死んだ時は悲しかったよ。だが、もう歳だったし、いつ死んでも不思議じゃなかったから、そういう心構えもあった。だがお前は違うな。予期しなかった家族の死は、そこまで辛いものなんだな」

「もう引きずっていたりはしていないんですけどね」

「気づいていないだけだ。と、私は思うがな。数学の原田を見て、お前はどう思った？」

「どうとは？」

「おかしいと思ったか。恐ろしいと思ったか。それとも可哀想だと思ったか」

「特に何も思いませんでしたね」

「そうだ。気をつける。たぶん青木は、そういうものに対して適応力がありすぎるというか、抵抗がなさすぎる」

僕は、僕が普通すぎるくらいだと思っていたので、なんだか変な感じだった。成績だって中の下だし、とりえらしいものもない。それとも、前島先生は自分の実体験から言っているんだろうか。

中間テストが終わったその次の日、りつが遊びに来た。僕の絵を見て、あんまり進んでいないねと呟いた。テストがあっただ、と言いつつがましく言ってしまったけれど、単に行き詰っているだけだったりする。

りつは僕の部屋に行くと、当たり前のようにベッドに寝転がった。いつものワンピースの裾に、ちらちらと膝小僧が見え隠れした。綺麗な肌だなあと思っていると、家の人はどうしたのと聞かれた。出かけているよ。おざなりに答えて、そこから視線を外した。気づかれないだろうが、気づかれていたら、僕はすごく恥ずかしい。

「音也は、彼女とかって作らないの？」

「できるわけないよ、そんなの。僕なんかを好きになってくれる人なんて、いないんじゃないかなあ」

「音也はね、自信がなさすぎるんだよ。男らしくなったらいいんじゃないかな」

そんな事言われても、困るのだけど。性格なんて簡単に変えられるようなものでもないし、僕はりつが好きなんだ。そうとは言えず、僕は口を閉じた。そう、こういうところを直さなくてはいけないなあとは思っけど。

「音也も、もうすぐ18になるんだし、そういう事を楽しんでもいいと思うよ」

「僕はりつが好きなんだ。胸くらい触らせてよ」なんて事言えるわけもなく、僕はごにごにょと言って視線を逸らした。

そんな僕を見て、りつは呆れたように笑った。でも、そういうところが音也なのかも知れないね。

その日、またあの夢を見た。学校から帰ると、リビングで両親がバラバラになっていて、部屋中血まみれになっている。足も手も、あちこちに飛散していて、頭だけの両親が僕を見て笑っている。そして、りつは裸で僕に抱きついてきた。誘うように僕の体を触り続けて、いつの間にかりつはバラバラになってしまった。

じつとりと張り付く服が気持ち悪くて、シャワーを浴びてから学校に行った。リビングでは、朝の一発だと言っておじさんと沙織が紙のようなものを口に含み、僕を見て明るく笑った。

学校に近づくにつれて、お祭り前の特有の騒がしさが大きくなっていく。僕の描いた絵は、一年棟の文化部スペースに展示される事になっている。佐伯くんに誘われて、僕たちはそこへ向かった。

佐伯くんは僕の絵を見るなり褒めてくれたけど、その時やってきた前島先生は、僕の絵を見て顔をしかめた。それから僕を見て何か言いたげに口を開いたけれど、結局首を振って何も言わずにどこかへ行ってしまった。

学校祭四日目、体育祭のバスケットが終わった頃、体育館が騒がしくなった。どこかのクラスの優勝が決まったとかじゃなくて、どうやら数学の原田先生が狂ったように笑い始めたかららしい。見ると、誰の声も聞こえずに笑い続けている。目は虚ろで、あちこちによだれがとんだ。強引に体育館から出された後、何もなかったみたいに体育祭は続けられた。みんななんとも思わないんだろうか。家に帰ると、僕の絵を見たというおじさんと沙織に、笑顔で迎えられた。

「やっぱり、お前の絵は最高だ」

快活に笑うおじさんに褒められて、僕も思わず笑顔になった。沙織もよほど嬉しいのか、何かに耐えるように笑いを殺している。

「ぶ……っはは。音也、最高」

おじさんもつられたように笑った。

「ぶっひゃ……あひゃひゃ！ おとやああ、もっといい絵が描きた

くないか？」

言われるまでもなく描きたいとは思うけど、そう簡単に描ければ苦勞しない。そう言う、限界とばかり沙織は大声をあげて笑った。

「アハハハハ！ 音也、あんた辛い事があるたびに、絵のすごさが増してるじゃない。気づいてなかったの？」

「え、そうなのかな？」

おじさんが答える。

「ああ、ああ！ そうとも。お前はもつともつといい物が描ける。俺たちは、それが見たいんだ」

そう言う、僕が何も言っても笑うだけで、答えてくれなかった。それどころか、僕が何かを言うたびに笑い声が大きくなった。

けれど、そんな事を言われて嬉しかった。だから、いつもは行かなかったお祭りにも顔を出そうと思ったのだけれど、りつから電話がかかってきた。

直接会ってその事を伝えたくて、褒められた事は黙っておいた。おじさんと沙織に、明日はりつが来ると笑顔で伝えた。すると、沙織は自分もりつさんと会いたいと言う。僕としても、自分の家族同然となった人をりつに紹介するのは望むところだった。午前中は出かけるらしいので、午後に紹介しよう。

次の日、相変わらずディスプレイに映ろうとしないりつを招き入れて、玄関で恒例の久しぶりだねを言い合ってから、リビングに向

かった。けれどどうやらまだ沙織は出かけているらしくて、僕の部屋でくつろぐ事にした。

「絵はできたの？」

りつは笑顔で言う。学校祭で展示する絵はできたけれど、家で描いているのはできていない。そういつと、りつは楽しみだなあと微笑んだ。

「音也の絵ってね、私好きよ。なんていうか、物の存在を見る事ができる気がして」

「あ、わかってくれて嬉しいな。そういうなんとなくを、表現しようっていつも思ってるんだ」

「そのうちに、私の事も描いて欲しいな」

りつはそう言って楽しそうに笑っている。直接描いているわけじゃないけれど、今描いているものはりつだっていう事は言えなかった。

「うまく言えないんだけどね」

とりつは続けた。

こうして、ただ一緒にいるだけで穏やかになれる。りつの微笑んでいる表情が好きだ。僕が悪い事をしたときは怒ったり、お父さんとお母さんが死んだ時は泣いていたり。そういうりつを形容する全部が、僕は好きなんだと思う。そのまま伝えたかったけれど、勇気が出せない。なので、

「描くよ。ずっと一緒にいたんだ、りつの色んなものを感じ取れるような絵を、そのうち描くよ」

そう言つと、りつは嬉しそうに微笑んだ。

「それは嬉しいな。なんかね、不思議なんだ、音也の絵って。パンドラの箱を開けたみたいない気持ちになるの。目一杯に絶望が描かれているんだけど、でもね、そんな世界に悪戯っぽく綺麗な物があるじゃない。それがすごく愛しく感じられて、泣きそうになるの」

午後を少し過ぎてから、沙織が帰ってきた。リビングまで迎えに行く、待ちきれないのかわざとらしくいきにきよるきよとしてる。

僕は思わず笑ってしまつて、今は部屋にいると言つた。りつを連れてリビングに戻つても、相変わらず待ちきれないというようにニコニコしている。僕がりつと並んで沙織の前に立つと、沙織は笑顔で言つた。

「りつさんは？」

「ここにいないじゃない」

僕が隣を指すと、沙織は芝居がかったしぐさで言つた。

「えー、でもお、誰もいないよ」

「え、何言つてるの？」

言いながら隣を見てみると、そこにはやっぱりりつがいる。紹介してもらえるのを待っているのか、にこにこしながら僕を見ている。

そこで、台所からおじさんのだみ声が響いてきた。

「ぶひゃひゃひゃひゃ！ お前、すげーよ」

あれ、おじさんいたんだ。間抜けに聞こえてしまったかもしれない。けれどちょうどいいかなと思って、おじさんにもりつを紹介した。

僕がりつを紹介しても、二人ともりつを見ようともしせずに楽しそうに笑い続けている。

「なあ音也、俺たちがお前の絵を気に入った理由、教えてやろうか」

「え？ うん、それは有意義だと思うけど」

そんな事よりも、りつを見てもらいたい。

おじさんは台所から出て来て、着いて来いと言った。沙織もそれについていく。向かった先は玄関。ちらりとりつを見ると、りつは頷いた。

「行つてきなよ、音也自身が言っていたじゃない、有意義なものだつて」

りつにまでそう言われてしまったので、僕は渋々おじさんたちに着いて行く事にした。おじさんの車は外国産の高級車で、シートも

革張りで座り心地がいい。僕は逆に恐縮してしまうのだけれど。

おじさんたちは、前の座席でたまに顔を見合わせて笑っていた。郊外からどんどん遠ざかっていって、街路樹よりも自然林が多くなり、やがて田畑をちらほら通り過ぎた。

家を出て三時間ほど経った頃、おじさんは車をとめた。ほったて小屋と言うのが一番似つかわしいぼろぼろの小屋は、打ち捨てられたまま放置されているように見える。近くに民家はなかったし、こんなところになんか何があるんだろう。

二人は黙って車を降りて、小屋に入ってしまった。僕もそれに倣う。外装にふれてみると、ちくちくと痛かった。

中に入った瞬間、十一月の肌寒い外気とは異質な寒気を感じた。なんだか冷たい空気……なのは冬も近いから当たり前なのだけど。それと同時に、刺激臭というかつんとするにおいがした。

まだ夕方の少し前だっというのに薄暗い室内を見回した。天井からいくつか糸が垂れ下がっていて、なぜか包丁や鎌、ナイフに短刀など、刃物の類がぶら下がっている。そして臭いの原因もすぐにはわかった。一部屋しかない小屋の奥に、腐った食べ物が山のように積み上げられている。

おじさんと沙織を見ると、天井にぶらさがっていた刃物を手にとり、刃の様子を見ている。ここで料理の練習でもしていたんだろうか。かといって、台所は見つからない。

「ここはなんですか？」僕が言うと、

「ここは、お母さんの墓場だよ」

沙織が静かに言った。

「ここだね、お母さんをお父さんと一緒に殺したの」

「えっ？」

「このナイフでぐさり、あっちの包丁でずぶり。骨って意外と硬くてね、切断できたあとの快感はすごいんだよ。あと、内臓は意外ともろかったかな。柔らかくて、刃をたてるとすぐに傷つくの」

薄暗くて、沙織の表情は見えない。俯き加減にナイフを見つめて、逆手に持ちかえて何かを刺すようなジェスチャーをした。

おじさんは僕の方に歩み寄り、肩を組んできた。

それから、鎌を僕の前でゆらゆらと見せ付けた。

「これでな、あいつの頭かさばいたんだよ。爽快だったぜえ？俺の嫁はな、綺麗な容姿だったんだよ。抱けばシミ一つない肌は滑らかで触ると心地よかった。さらには家事洗濯掃除、俺と沙織のメンテナンスまでできる良妻賢母だった」

おじさんは鎌を僕の首筋にひたとあてた。

「まずは足をきった。それから腕。達磨になったあいつは、泣き叫んで俺に助けを求めた。ああ、沙織があいつを達磨にしたんでな、俺は見ただけだった。それから、俺があいつに近づくと、あいつは助けを求めてきた。助けて、殺さないで、ってな。そこで、俺は言っちゃったよ。お前はいい女だった、綺麗な妻だった、不満はなかった。あいつは言った。だったらお願い助けて」

おじさんはその時の感触を思い出そうとしているのか、興奮したように鼻を鳴らした。

「だからこそ、俺は達磨になったあいづを犯してやった。そうしたら、どうなったと思う？」

僕は首をふった。

「なっ、なっしゃあ！ ごふっ、あぐ…… なにもかも諦めた顔で、気持ちよさそうにあえいでた。手足の切り口は焼いて止血してたから、そう簡単には死ななかったしな？」

僕は、その時初めて鎌がさび付いている事に気づいた。よく見れば、それは赤黒い塊がこびり付いているさびだった。

「……そうですか」

「ははっ、淡白だな音也」おじさんは愉快そうに笑った。「どうして殺したのか、わかるか？ なんとなくだ音也、なんとなくだ。俺はな、毎日毎日同じ事の繰り返しだけの世界に飽き飽きしてるんだよ。何か刺激はないか、そう思ったらとまらなかった。まずはクスリ、それから女、酒煙草。クスリはまあ、多少満たされるものはあったが、それでも何かが足りなかった。

そんな時だよ、お前の絵に出会ったのは。ありゃあ狂ってる、とことんどギツイ狂気を繊細に描いている。それを見てから、俺は考えた。人を殺すような絵を一度沙織に描いただろ？ あれを見て、俺は試してみようと思ったんだ」

僕は、そんなつもりで描いたんじゃない。それとは真逆のつもり

で描いていた。けれどもしかしたら。

「それからな、お前の家族を殺した時もたまらなかったよ」

「……はい？」

沙織が狂ったように笑い始めた。おじさんは続ける。

「お前の家族をバラバラにして、それから後のお前の絵が凄まじかった。どんなドラッグよりも魅力があったね。」

俺はな、狂いたかったんだよ音也。狂ってくるって狂って、世界から抜け出してみたかった。子どもが蟻を踏み潰すように、トンボの羽や尻尾をちぎるように。手っ取り早いのは気がふれる事だろう？ 自分だけの世界にいる事ができるようになるんだからな。理由なんて、そんなもんだ。だが実際に気がふれたとかいう状態になってみると、快感すぎて抜け出せねえ」

なんだか、地面が妙に歪んでいる気がする。目に見える物は全部ぐにやぐにやになって、聞こえる音は周波数の合わないラジオのようだけど、どうしてか意味ははつきりと理解できた。

「……あの、今の話、りつには話さないでくれますか」

「やああああああ！ 音也、いないよいないんだよ」

沙織が叫んだ。薄暗い部屋なのに、目が妖しく光っている。そして再び笑い始める。

「そのりつなんて奴はさあ、いねえんだよ。俺が！ お前の家族と一緒に殺したんだからな」

おじさんはそう言うと、狂ったように笑い始める。沙織も笑いながら、途切れとぎれに言った。

「アハハハハ！ あんた、最高だよホント。お父さんがあんたの家族を殺したっていうのに、気づきもしないで家族面。けどそんな間抜けなあんたにもとりえはあるからね、あんたの絵はまるで麻薬だったよ。とことん狂気を描いてる、それも何か辛い事があるたびに、それがさらに輝くんだ」

沙織はそれ以上我慢できないというように、大声で笑った。おじさんがひきとる。

「俺たち、それが見たいがためにお前の家族殺したんだぜ、最高だろ？ お前の絵には、力がある。人を狂わせるとびっきりの道具だ。お前の家族が死んでからの絵は、どんな麻薬よりも、どんな奴でさえ虜にさせられちまうんだ！ ふしゃああああ！」

おじさんと沙織は、笑ったり奇声をあげたりしている。二人ともどうしてしまったんだろう、何を言っているんだろう。僕ははつきりしない思考で、ようやく理解した。

部屋の奥にあるあれは、たぶん沙織の母親だ。何かの食べ物だと思っていた物は、あちこちきりとられた腐った死体だ。手足を切断されて、内臓をばらまかれて、腐食しきった人間だ。

それから、気づけば家に戻っていた。自分の部屋に戻って、そこで初めてどうやって帰ってきたんだろうと不思議に思った。りつの事を思い出してリビングに行ってみると、おじさんたちが僕を見て笑った。けれどそれだけで、りつはどこにもいなかった。

月曜日、学校に行くと数学の原田先生の話題で持ちきりだった。まことしやかな噂が流れているので、さすがに見咎めたのか担任は遠まわしに自重するように言っていた。

佐伯くんも、僕と顔を合わせると面白がるような調子で憶測を話した。

「なあ、やっぱなんかにとりつかれたのかな。だってよ、あんなの普通じゃなかっただろ。自分で狂ってるとか叫んでたし」

「やっぱり、おかしくなってたのかなあ」

「そうに決まってるだろ」

佐伯くんはそう言っていたけれど、僕はむしろ逆だった。問題、というか大事なのは、どうしてそうなってしまったのか。だって、やっぱり普通の人から見たら、ああいうのは異常なのだから、何がそこまでさせたのか僕は気になった。

もしも僕が原田先生の境遇を知っていたら、共感だってできるかも知れない。

美術室に行くと、前島先生に準備室に連れ込まれた。そして開口一番に、

「なあ青木、世界を肯定するっていうのは、否定するという事でもあると思わないか」

といきなり哲学的な事を問われて、返答に困った。

「たとえば、明日隕石がこの学校に落ちるかもしれない。だが、私はそれを見てこう思う。ああ、仕事がなくなつてよかったかもしれない、隕石が落ちてよかった」

言わんとする事が、ぼんやりとわかつた気がする。前島先生は、それ続ける気はないらしかつた。

「なあ青木、もう美術部に来るな。私にはもう、何もできないようだ。お前の絵を見て、私は青木を怖いと思つてしまつたんだ。……本当にすまない」

そうやつて暇を出されてしまったので、僕は僕の絵を描き続ける事にした。何度も何度も絵の具を重ねた絵は、なんとなく形ができてきている。ぼんやりとだけれど、感じもでてきていると思う。

そこへ、沙織が部屋に入ってきた。

「調子はどう？」

「あ、もうすぐできると思うよ」

おざなりな相槌を打つてから、沙織は僕の絵を覗いた。けれど、見た瞬間に顔をしかめて、何かと問われた。

「僕の家のリビングだよ」

「どうしてこんなもの描いてるの？」

「どうしてって、前から描いていた物だし、途中で投げ出すわけにはいかないよ」

沙織は不機嫌に鼻を鳴らして、部屋から出ていった。

遠くから絵を見てみると、どうにも赤色のハリというか、具合がよくない。どうしてだろう。

その日のうちに、おじさんに呼び出された。

「お前らしくない物を描いているらしいな」

「僕らしくない物って……」

「お前に夜な夜なクスリを打った意味がない。そんな物、今すぐ捨てろ」

ああ、どうやら僕は狂っていたらしい。だって、僕も彼らと同じように、クスリをやっていたのだから。

けれど、僕は描き続けた。そういえば、おじさんたちは僕の家族を殺していたと言っていた。憎いとか、どうしてだとか、そういう思いは全くないけれど、ただ、りつがいなくてというのがあまり信じられない。

りつとは、両親が死んでから何度も会っていたし、触れた事もある。けれど、りつがお世話になっているという親戚に連絡してみてもりつがいるという話はなかったし、携帯電話にもりつの番号は登録されていなかった。

それからも、たぶん僕はクスリを打たれていたと思う。夢を見る頻度が多くなったし、食欲も前より少なくなった。

佐伯くんは僕を心配して、一緒に帰ろうかと誘ってくれた。佐伯くんも部活はないというし、断る理由もないので了承した。

「なあ青木。俺さ、お前に近づいたのには理由があるんだよ」

「そうなんだ」

「ああ、なんていうかさ、青木ってなんか他の奴らとちよつとずれてんじゃん。感覚が違うつていうか、人とは少し違う事を考えているつていうか」

僕は馬鹿にされているんだろうか。そんな思いが顔にでていたのか、佐伯くんは慌てたように手をふった。

「いや、なんていうか俺と似てるつて思うんだよ。同じ穴のムジナつていうか」

「よくわからないかな」

「うん、俺つてさ、ガキの頃虐待されてたんだよね。誰につて、親に。まあ今は親戚のところ暮らししてるんだけど、ホントの親はどつちも交通事故で死んだつて聞いた」

僕は何を言つていいかわからず、佐伯くんをじつと見つめた。

「うん、よくある話だろ。どこにでも、誰にでもありえるありふれた話なんだ。でもさ、そういう境遇とは関係ないところで、たまー

に突然変異しちゃうのがあるんだよね」

「それが、僕だと」

「ああ、普通の家族で、普通の学校生活で、普通の成績でっていうやつが。もちろん、すごい天才とか、馬鹿だとかもあるけどさ。どんな時代にも、たまに狂ったのがいるんだよ」

「僕が狂っているか……」

「ああいや、気に障ったんなら謝るよ。でもそうじゃなくて、うまく言えないんだけど、そういう奴はとにかく、普通を演じなきゃいけないんだ」

佐伯くんの言わんとしている事が、ようやくわかった。みんなと笑ったり、おかしい話を話したり、そういう普通を演じなくちゃいけない。つまりは、そういう事なんだろう。

別れ際に、佐伯くんは元気だせよ、笑ってりやそのうちずっとそうできる。みたいな事を言って僕の肩を軽く叩いた。

学校に行くたびに自覚してしまう事がある。あれ以来、前島先生は僕を避けていると思う。佐伯くんはそれを不思議がっていたけれど、僕は特に何も思わなかった。

ある日、原田先生が精神科に入院したと耳にした。原田先生は病気だったんだろうか、少し大きな声を出して、ただ笑っていただけだっていうのに、心理学の先生は何か異常があると思ったらしい。

夢を見た。りつが一人で、綺麗なリビングに立って僕を見ている。

僕は自分が裸だと気づいて、恥ずかしくなったけど、りつは微笑している。僕は近づいてりつに触れた。その瞬間、まるで僕の指が起爆スイッチだったみたいに、りつの体は膨れて、はじけた。

もう少して絵が完成するという頃に、おじさんが倒れた。僕の前ではったりと。沙織もいたけれど、倒れたおじさんを見てニコニコとしているだけで、ソファに身を沈ませて動こうとしない。

おじさんに手を伸ばそうとすると、急に腕が重くなった。どうしてだろう、助けなくちゃ、おじさんは死んでしまうかもしれないというのに。ぎりぎりという音がする。ややあつて、それが自分の血の流れだと気づいた。嫌な汗で全身を濡らしながらじっとしていると、正気に戻った沙織がどこかに電話をかけた。

それから、医者っぽい服装の人がやってきて、おじさんをどこかに連れていった。沙織もそれについていったけれど、僕は家で待つ事にした。

「お父さん、入院するって。普通の病院じゃあれだけど、コネがあるからそこに」

後で、沙織はそう言っていた。

僕は、どうしてあの時すぐに行動できなかったんだろう。もしかすると、死んでいたかもしれないのに。おじさんが死んでしまうと僕と沙織の生活費はどうするんだろう。お金がないと、生きていく事だっでできない。だっていうのに、僕はどうして動かなかったんだろう。

そういえば、最近りつと会っていない。

雪が積もり始めた頃、ようやく絵が完成した。肩の力を抜いた僕の頭を、どこからともなく現れたりつが撫でてくれた。りつは穏やかに微笑んでいて、僕を慈しむように見ている。

ああ、やつぱりいるじゃないか。

僕はりつの方を向いて、りつに手を伸ばした。少し冷たいりつの頬は、滑らかで瑞々しい。

「ねえ音也、好きよ」

甘くて、頭の奥がしびれてしまうような声。りつも僕の頬に触れた。抱きしめて、体いっぱいにりつを感じたいと思った。ふと、何かを壊したいと感じるのと似ているな、とも思ったけれど、すぐにどうでもよくなった。

けれど、りつを抱きしめたと思ったのに、僕が抱きしめていたのは何もない空虚な空間だった。

ゆっくりと振り返る。お父さんやお母さんとご飯を食べた事がある、僕とりつも笑っていた事のあるリビングが絵描かれている絵。なんとなくが感じられるような、そんな絵になったと思う。

……ふと、笑いがこみあげてきた。キャンバスに手を置いて、息を漏らした。一度そうしてしまうと、とまらなくなった。

どうしてか、すごく可笑しい。りつがいなくていうのに、こんなにも笑えてしまう。

僕はもう、ずっと前から狂っていた。

（後書き）

感想を置いていって頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8061n/>

アイデアにて

2010年10月22日00時53分発行